

林 達弘

今回我々は誤って硝酸銅を服用し胃炎を来した2例を経験したので報告する。

症例1；46歳男性。硝酸銅溶液をジュースと間違えて誤飲。直後より激しい嘔気、嘔吐および、大量の発汗と唾液流えんを認め救急車にて来院。

症例2；43歳男性。症例1の同僚であり、ほぼ同時に微量の硝酸銅を服用、激しい嘔吐のため同様に救急車で来院した。

症例1、2とも外来にて胃洗浄を行い、入院後、強制利尿、下剤-Gによる強制排便を行った。症例1は翌日激しい腹痛出現し内視鏡にて胃体部から十二指腸にいたるAGML様変化を認めた。症例2は自覚症状無く、内視鏡所見でも発赤は軽度で4病日目退院となった。症例1は保存的療法にて5病日目に自覚症状消失、8病日目の内視鏡所見では発赤軽度となったため、9病日目に退院となった。

2症例とも銅による影響は見られず、硝酸による影響が主であった。2症例の経験より、若干の文献的考察を加え報告する。

12. 魚骨によるメッケル憩室穿孔の1治験例

(聖隷浜松病院 外科)

田中 信一・鈴木 啓子・神尾 孝子・
町田 浩道・小島幸次朗・中谷 雄三

魚骨の大部分は、自然に排泄されるものが通常であるが、ごく稀に消化管穿孔を引き起こし、穿孔部から偶然発見される場合がある。今回魚骨によりメッケル憩室穿孔を来した男性高齢者の症例を経験したので報告する。

症例は、79歳男性。下腹部痛を主訴として近医受診、投薬を受けたが、その後も右下腹部痛が持続するため当院を紹介され来院した。白血球は19,000と著明に上昇しており、臨床所見では右下腹部に強い圧痛とdefenceを認め、虫垂炎穿孔と診断し、手術を施行した。しかし虫垂には炎症所見は認められず、ileum endより約45cm oral側のメッケル憩室に魚骨による穿孔を認め、これにより生じた汎発性腹膜炎であった。手術はメッケル憩室を含む約10cmの小腸切除を施行した。

以上、術前虫垂炎穿孔との鑑別が困難であった魚骨によるメッケル憩室穿孔の1症例を経験したので若干の検討を加え報告する。

13. 乳腺間質肉腫の1例

(呉羽総合病院 外科)

浅沼 瑞子・関 由紀夫・小坂 博美

乳腺原発の非上皮性悪性腫瘍は、比較的稀な疾患であり、なかでも間質肉腫の報告は少ない。今回我々は、右乳房に原発した間質肉腫の症例を経験した。

症例は51歳女性で、右乳房腫瘍を主訴に当院を受診した。触診にて右乳腺外側に2×2cm大の硬い腫瘍を触れた。生検にて、骨・軟骨化生を伴う乳癌が最も考えうるとの病理診断にて定型的乳房切断術を施行した。後日、追加染色を施行し、最終的に病理組織診断は乳腺間質肉腫であった。術後、化学療法を施行したが術後2カ月目に肺転移を認め、4カ月目に気道閉塞にて突然死した。

乳腺原発間質肉腫の本邦報告例は自験例を含めて18例であり、本症の診断・治療に関して若干の考察を加えて報告する。

14. 後腹膜腫瘍の治験例

(聖隷浜松病院 外科)

鈴木 啓子・田中 信一・神尾 孝子・
戸田 央・神崎 正夫・中谷 雄三

最近2年間に後腹膜腫瘍を4例経験したので報告する。

症例1：58歳女性。右下腹部腫瘍にて来院。10cm大の腫瘍で、病理組織学的には、mucinous cystadenomaであった。症例2：74歳男性。左上腹部腫瘍にて来院。15cm大の巨大腫瘍で、liposarcomaであった。症例3：36歳女性。心窩部痛にて来院。腫瘍は触知されなかったが、echo CTにて腫瘍を指摘、5cm径でmyelolipomaであった。症例4：53歳女性。心窩部痛にて来院。5cm径の腫瘍で、neurinomaであった。

後腹膜腫瘍には悪性のものが多く、悪性リンパ腫、平滑筋肉腫が多いといわれている。今回経験したmucinous cystadenomaは中でも比較的稀な疾患なので、これを中心に報告する。

15. IVHカテーテル感染症診断におけるisolator system (Dupont社製)の有用性について

(釧路中央病院 外科)

佐藤 忍・稲田 直行・中島清隆

当院では平成元年3月よりDupont社製isolator systemを使用しIVHカテーテル感染症の診断を行ってきたが、今回その有用性について検討した。

[対象と方法]平成元年3月から11月までのIVH施行患者51例のうちIVHカテーテル感染症を疑った16例に対しisolator培養、通常を中心静脈培養を行った。